

この季節、目にする花として「ヒガンバナ」があります。原産地は中国とされ、古い時代に日本に渡来した帰化植物とされています。どのくらい古いかというと、ヒガンバナの別名である「<sup>まんじゆしゃげ</sup>曼殊沙華」は、音の由来が古代インドのサンスクリット語（梵字）とされており、日本に仏教が伝来したころに持ち込まれたと思われます。

この花は俗名が多く「死に人花」や「幽霊花」など、人の死に関係した名前が各地に見られます。理由として考えられるのは、ヒガンバナの持つ有毒成分であるアルカロイドの1種のリコリンに、野生動物に対する忌避効果があり、土葬を行っていた時代においては、動物による墓地の掘り起しを止める効果があったと考えられたため「仏教」「埋葬」「墓地」などのキーワードが出てきます。

また、水田の畔などでもヒガンバナが咲いている風景をよく目にします。農家の方から、ヒガンバナを畔に植えると、水田の水漏れ原因の1つであるモグラを寄せ付けない効果があると聞きました。

樹木苗の植栽地でイノシシの掘り起しやシカの食害に頭を痛めていた場所に、ヒガンバナを植えてみました。さて、どれほどの効果があったかというと、これまでヒガンバナの近くまで掘り起しをしていたイノシシも、1～2ヶ月前でびたっとやめました。嗅覚に秀でたイノシシが、ヒガンバナの有毒成分の匂いを感じて、危険を回避するため掘り起しをやめたのだと思われます。植栽地を取り囲むように植えてみると、侵入もしなくなり、効果があったと考えられます。

シカについても、8月に伸びてきたヒガンバナの花茎が1～2株ほど食害にあいましたが1度だけで、それ以降はありませんでした。イノシシとは違い植栽区画内への侵入を止めることはできませんでしたが、区画内で採食することもなく、通過するだけになりました。ただし、アナグマは、リコリンに無頓着で、掘り出された球根に歯形が残っていたりします。

ヒガンバナと同じ仲間の植物に「スイセン」があります。ニラと間違えて誤食してしまった食中毒事故が、よくニュースになります。スイセンも、リコリンを主体とする有毒物質を含んでいるため、同様の効果が見られます。

ヒガンバナの花期は9～10月で、開花終了後に出葉し、冬季に光合成をして栄養成長を行い、5月には地上部の葉はなくなります。一方、スイセンは12月に出葉して1～3月が開花期になり、葉は5月いっぱい枯れてなくなります。どちらも盛夏には葉がなくなります。しかし、球根が地中にあるだけでイノシシの掘り起しは回避できます。このことからイノシシの畑地への侵入を抑えることも可能かと考えます。

(杉野)



ヒガンバナ